

長野県植物誌改訂に向けた大北地域の取り組みと標本保管の意義について

千葉 悟志^{*1}・藤田 淳一^{*2}・吉沢 敏江^{*3}・有川 美保子^{*4}・丸山 優子^{*4}

An approach of the Daihoku area for the Nagano flora revision and about
significance of the specimen storage

Satoshi Chiba, Junichi Fujita, Toshie Yoshizawa, Mihoko Arikawa and Yu-uko Maruyama

要旨

長野県植物誌は 1997 年に刊行されて以来、20 年余りが経過し、その間、新産や初記録等が報告されるようになり、長野県においても改訂の必要性が高まった。そこで、2017 年に長野県植物誌改訂委員会が有志により組織され、県下を各 10 地区に分割し、改定に向けた調査が行われることとなった。本稿では、市立大町山岳博物館が長野県植物誌改訂に向けた事業へ参加した理由や参加者の動向、採集した標本そして今後の展望について触れた。

キーワード：長野県植物誌 改訂 博物館 収集保管

1. はじめに

長野県植物誌は 1997 年に刊行されて以来、20 年余りが経過し、その間、新産や初記録等が報告されるようになり、長野県においても改訂の必要性が高まった。そこで、有志による長野県植物誌改訂委員会が組織され、現在、県内を 10 地区に分割し、長野県植物研究会会員をはじめ地域住民の参加者も得ながら活動が行われている。

大町市・池田町・松川村・白馬村・小谷村からなる大北地域は、市立大町山岳博物館（以下、愛称の「山博」という。）を拠点に、長野県植物研究会（以下、「長野植研」という。）や大町山岳博物館友の会（以下、「友の会」という。）の会員が月 1 回のペースで調査会に集い、継続的に収集が行われている。これら収集された根拠標本は、いつでも見直しができるよう山博の倉庫（標本庫）に登録・配架されている。

ここでは、山博が長野県植物誌改訂に向けた事業への参加に至るまでの経緯や活動で得られた会員による発見について報告したい。

2. 山博が抱えていた資料収集・保管事業の問題と解消に向けた取り組み

現在、山博の植物標本は本館 2 階倉庫の標本棚に

保管されている。かつて、この倉庫は隣の研究室とともに、人が入って作業ができないほどに高く積まれた茶箱が占拠していて、茶箱の中味は新聞紙に挟まれた植物であったが、恐らく現在（3 代目）の博物館が建設された 1982（昭和 57）年以降、ほとんど手が付けられていなかったものと想像され、博物館の収集保管事業は長期間、停滞していた。これは人文科学系・自然科学系の分野を問わず、同じ状況であったことから、山博の創立 60 周年を機に、70 周年（2021 年）を迎えるまでに資料の登録と活用ができる環境を整えることを目標に取り組まれた。

植物分野では、2015（平成 27）年から 2 年間にわたり約 7500 点の標本が中山冽氏（前長野県植物研究会会長）により同定された。同時に、標本の作製が進められ、作製には友の会会員があつた。友の会には以前から「花めぐり紀行」というサークルがあり、そこに参加する会員が中心になって行い、2022（令和 4）年 12 月現在、登録・配架された標本数は約 13000 点で、うち 11500 点余りが全国の自然史系博物館の標本情報が集まる web サイト「サイエンスミュージアムネット（S-net）<https://science-net.kahaku.go.jp/>」で公開されている。

3. 資料収集・保管事業に向けた環境整備と植物誌改訂に向けた事業への参加

標本の登録・配架を進めるにあたり、倉庫と研究室に冷暖房設備が導入された。その後、かねてより予算要求していた標本棚（宮垣鋼器製）15 台、恒

*1 市立大町山岳博物館

〒 398-0002 長野県大町市大町 8056-1

*2 藤田淳一 長野県松本市

*3 吉沢敏江 長野県北安曇郡白馬村

*4 大町山岳博物館友の会 長野県大町市

温機（エスペック製）1台、バイオメディカルフリーザー（Panasonic 製）1台が年度ごとに認められ、倉庫の窓枠に設置されていたブラインドも遮光性の高いカーテンに変更され、資料を保管する環境が整い、新たな資料収集が可能となった。

1980（昭和 55）年以降、山博による植物関連の資料収集（植物採集を含む）は行われてこなかったに等しく、それを再開する上で、植物誌改訂に向けた事業への参加は格好の機会と考えられた。また、博物館の人的配置の実情（例えば、担当学芸員の異動や退職、人員削減）を考えれば、公共施設の資料収集保管事業を継続していくには、ネットワークの構築と継承が重要で、長野植研の会員の協力を持続的に得ることが必要であるし、地域の核となる人材育成につながることへの期待も大きいと思われた。そしてなによりも、これらが大町市の掲げる大町市第 5 次総合計画や大町市第 7 期社会教育計画、山博の使命書の目的と合致していたことが参加を後押しした。

4. これまでの活動と参加者の動向

大北地域の活動は、2017（平成 29）年よりはじまった。初年は長野植研や友の会サークル「花めぐり紀行」の会員を募ったが、サークルからの参加者はほぼ植物採集や標本づくりなどの経験がなかった。そこで 1 年間は、長野植研会員が標本の重要性について（私物化ではなく公共性を持たせることの重要性など）説きつつ、採集方法や（綺麗な）標本のつくり方についても手解きをした。

2 年目になると、調査会への参加人数は減ったが、継続していた同定済み標本のマウント作業には参加したいという会員もいて、興味は違えどもやりがいを見出し、博物館に通われていることは、山博は社会教育施設として、長野植研は社会貢献という形で役割を果たせているのではないだろうか。

5. 参加者による発見！

この 6 年間で、大北地域のすべての行政区で、調査会が実施された。特段、秘境の地に訪れたり、北アルプスの亜高山帯や高山帯に出向いたりすることはせずに、ほぼ里地・里山と呼ばれる範囲での実施であった。

しかし、それが意外な発見にもつながった。ここでは、参加者が得た採集品を見ながらいくつか紹介

したい。

なお、長野県内の標本記録については、S-net の閲覧（2022 年 1 月 9 日、確認）で得られた標本データを基にした。従って、個人あるいは団体の所有や県内外の博物館等で未登録のものについては、ここでは反映されていない。

①アイダクグ

Cyperus brevifolius (Rottb.) Hassk. var. *brevifolius*

これまでに長野県での標本記録はなく、藤田（2019）が初の報告となる。大北地域では、白馬村で 2 点 (OAM10534; 12556)、小谷村で 2 点 (OAM5830; 11316) を採集した（図 1）。

長野県内では、アイダクグが認識されておらず、ヒメクグ *C. brevifolius* (Rottb.) Hassk. var. *leiolepis* (Franch. et Sav.) T.Koyama として扱われてきた可能性が考えられる（藤田 2019）。

②ノミノコブスマ

Stellaria uliginosa Murray var. *uliginosa*

これまでに長野県での標本記録はなく、藤田ほか（2021）が初の報告となる。大北地域では、白馬村で 1 点 (OAM12614) を採集した（図 2）。

隣県では、神奈川県、群馬県、岐阜県で認識されているが、全国的に認識度が低いものと考えられ、他種と混同されている可能性がある。

③キツネノマゴ

Justicia procumbens L. var. *leucantha* Honda

長野県で採集されたものは、信州大学自然科学館に南木曽町 (SHIN118948)、長野県環境保全研究所に上田市 (NAC175671; 175675)、南木曽町 (NAC161376; 161380)、高森町 (NAC180649; 181000)、飯島町 (NAC143224)、天龍村 (NAC114881; 114882; 114883; 114884; 114885; 114886; 114887; 114888)、飯田市美術博物館に南木曽町 (ICM9909)、飯島町 (ICM2713, 8816)、中川村 (ICM3447) で採集された標本が収蔵されている。

大北地域では、これまでに標本記録がなく、池田町で 1 点 (OAM12440) を採集した（図 3）。

④マメアサガオ

Ipomoea lacunosa L.

長野県で採集されたものは、信州大学自然科学館に長野市 (SHIN89739; 54840)、飯田市

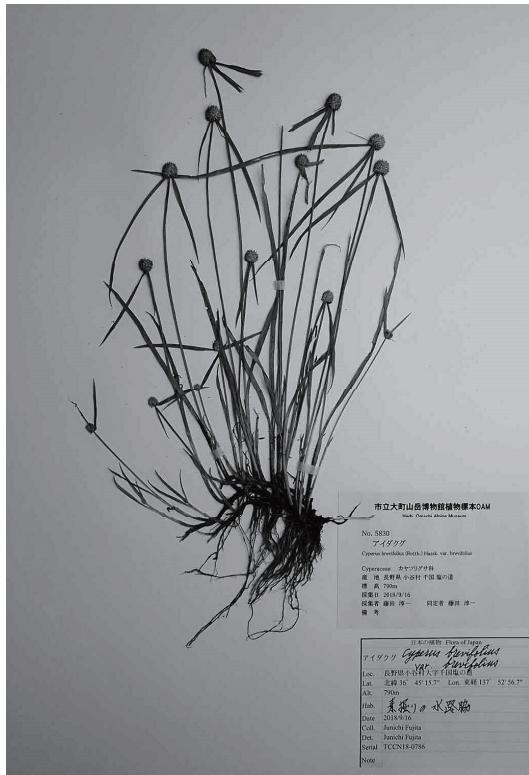


図1 アイダクグ
(長野県小谷村千国: OAM5830/TCCN18-0786: 2018年9月16日)



図2 ノミノコブスマ
(長野県白馬村北城: OAM12614: 2020年7月12日)



図3 キツネノマゴ
(長野県池田町会染: OAM12440: 2021年8月30日)



図4 マメアサガオ
(長野県松川村高瀬川: OAM12719: 2019年9月10日)



図 5 ミツバヒヨドリバナ
(長野県白馬村北城: OAM12560: 2020 年
7 月 29 日)



図 6 オオツノハシバミ
(長野県池田町会染: OAM11455: 2021 年
8 月 22 日)



図 7 ヤブツルアズキ
(長野県池田町会染: OAM12491: 2021 年
8 月 25 日)



図 8 ベニバナセンブリ
(長野県白馬村北城松川: OAM10509 :
/TCCN20-0528 : 2020 年 7 月 12 日)

(SHIN149169)、長野県環境保全研究所に長野市(NAC135830; 137388; 190249; 190250)、飯田市(NAC173726)、佐久市(NAC16104)、安曇野市(NAC123973;)、高森町(NAC184842; 185554)天龍村(NAC114925)の標本が収蔵されている。

大北地域では、これまでに標本記録がなく、松川村で1点(OAM12719)を採集した(図4)。

なお、似たものに熱帯アジア原産のホシアサガオ*I. triloba* L.があり、大町市で1985年に1点(OAM3763)が採集されているが、長野県ではほかに採集記録がない。

⑤ミツバヒヨドリバナ

Eupatorium tripartitum (Makino) Murata et H.Koyama

サワヒヨドリ*E. lindleyanum* DC. var. *lindleyanum*とヒヨドリバナ*E. makinoi* T.Kawahara et Yahara var. *makinoi*との雑種と考えられていたが、種子は正常で、独立種とする見方が強い。

長野県で採集されたものは、長野県環境保全研究所に長野市(NAC129963)、神奈川県立生命の星地球博物館に信濃町(KPM-NA0017632)、小谷村(KPM-NA0189353)の標本が収蔵されている。

大北地域では、新たに白馬村で3点(OAM10525; 11418; 12560)を採集した(図5)。

⑥オオツノハシバミ

Corylus sieboldiana Blume var. *mandshurica* (Maxim.) Ex Rupr.) C.K.Schneid.

長野県で採集されたものは、長野県環境保全研究所に須坂市(NAC166570)、神奈川県立生命の星地球博物館に上田市(KPM-NA0003588)の標本が収蔵されているのみである。

大北地域ではこれまでに標本記録がなく、池田町で3点(OAM11375; 11455; 12754)を採集した(図6)。

⑦ヤブツルアズキ

Vigna angularis (Willd.) Ohwi et H.Ohashi var. *nipponensis* (Ohwi) Ohwi et H.Ohashi

長野県で採集されたものは、信州大学自然科学館に長野市(SHIN110786; 73102)安曇野市(SHIN58816; 55542)上田市(SHIN119933)阿南町(SHIN130216)松本市(SHIN140607; 138191; 155915)佐久市(SHIN106954)、筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所に上田

市(SUG6996; 7932)、東御市(SUG7335)、長野県環境保全研究所に長野市(NAC152038; 152039; 152077)、飯田市(NAC116532)、佐久市(NAC179551; 197552)、千曲市(NAC161495)、池田町(NAC145592)、飯田市美術博物館に駒ヶ根市(ICM3444)、飯島町(ICM2710; 5562)、ふじのくに地球環境史ミュージアムに泰阜村(SPMN79474)、倉敷市立自然史博物館に池田町(KURA135571)の標本が収蔵されている。

大北地域では、長野県環境保全研究所と倉敷市立自然史博物館にそれぞれ1996年8月25日と1922年8月31日に池田町で採集された標本が各1点収蔵され、この度も池田町で1点(OAM12491)を採集した(図7)。

⑧ベニバナセンブリ

Centaurium erythraea Raf.

これまでに隣県や長野県での採集された記録はなく、白馬村で1点(OAM10509)を採集した(図8)。なお、本種に似るハナハマセンブリ*C. tenuiflorum* (Hoffmanns. et Link) Fritschが白馬村で2018年に採集され、長野県環境保全研究所に1点(NAC190417)が収蔵されている(星山2019)。

このほかにも、藤田(2021)が提唱したホソクマツヅラ*Verbena halei* Smallのほか、ヒメタイヌビエ*Echinochloa crus-galli* (L.) P.Beauv. var. *formosensis* Ohwi、ヤワゲフウロ*Geranium molle* L.(OAM10415)、ホウキヌカキビ*Dichanthelium scoparium* (Lam.) Gouldなどの県新産種も見出された(藤田2019; 2020)。

藤田(2019)は、このほかに早咲きのオオクルマバナ*Clinopodium coreanum* (H.Lév.) H.Hara subsp. *stoloniferum* Yonek.を報告したほか、キランニシキゴロモ*Ajuga × bastarda* Makinoなどはタチキランソウ*A. makinoi* Nakaiと混同されている可能性について言及し(藤田2020)、ヨツシベヤマネコノメ*Chrysosplenium japonicum* (Maxim.) Makino var. *tetrandrum* (H.Hara) Y.N.Leeにおいては、基本種であるヤマネコノメソウ*C. japonicum* (Maxim.) Makinoとの薬の数の違いについて、区別の是非を議論する必要性についても問題提起している(藤田2022)。そして、それらの情報は長野県植物研究会誌のほか、長野県植物誌編纂委員会News Letter「SHNNENSE」を通して情報共有された。

採集した標本はすべてが同定を済ませたわけではないため、登録・配架が進めば、興味深い種がまだ

見つかるかもしれないし、今後の参加者たちの活動によっても発見がもたらされることだろう。

6. おわりに

この6年間は、里地・里山と呼ばれる範囲で調査会を実施してきたが、それでも何かしらの発見があることがわかった。ほかの地区で開催されている調査会においても同様であって、1997年の長野県植物誌発刊以降、20年余りを経過した現在においては、各地区からいくつもの新産や初記録の報告は急激な変化を感じさせつつも、私たちが常日頃、身近な場所に目を向けてこなかったことを物語っているようで、その間に認識されないまま消失していった種もあるかもしれない。

初の長野県植物誌編纂に関わられた方のなかには、すでに他界された方もいて、採集者の減少や高齢化は全国的な問題となっているが（角野 2013）、標本作製が励行される仕組みを作ってこなかったことも情報が蓄積されなかつた一つの原因と考えられる。そのため、次世代の採集者を育てるためには、博物館等が開く標本作製にかかる講座がトレーニングの場となり得る可能性が秘められていて、博物館側にとっては質の良い標本の受け入れにつながる。指導にあたっては、学芸員の技量にのみ頼るのではなく、標本作製の技術を有する者があたっても良い。そうすることで、指導者がこれまでに蓄積した技術や知識の伝承が期待されるからである（志賀 2013）。

しかしながら、標本の受入に際しては、すでに、収蔵スペースにゆとりがなく標本を受け入れたくても受け入れられないというのがどの博物館でも共通した悩みとなっている（初宿 2011）。

近年、山博には家族の遺品となった登山道具や登山関係の書籍、床の間に飾ってあった動物のはく製などの寄贈の問い合わせが多く寄せられている。故人からすれば、お宝だが、家族からすれば不要なもので受け入れ先を失ったこれらは残念ながら廃棄処分されることになるだろう。

長野県植物誌改訂に向けて得られた標本は、幸いにも各地区的博物館や研究機関等に分散して保管されている。このように収集された根拠標本はまとまりのある高い価値のあるコレクションであり、地域を記録する文化財的な価値を有するようになる（佐久間 2011）。しかし、博物館や研究機関だからといって保管管理が安泰というわけではない。大学で

あっても、移転するにあたり収蔵スペース確保のための費用捻出が困難という理由から標本を手放そうとする時代だ。ましてや、地方自治体の財政は今後、さらに厳しい状況下になるであろうことは想像に難くない。

寄贈後の標本がそのような危機的状況とならないようにするにはどうしたら良いのか、私たちは真剣に考え、具体的な方策を提案する時期をすでに迎えているのではないか、そういう議論の機会を長野植研のなかで設けても良いと思う。

7. 引用文献

- 藤田淳一（2019）長野県植物誌改訂調査で確認された県新産種の紹介 . 長野県植物誌 52 : 101-108
- 藤田淳一（2020）長野県植物誌改訂調査で確認された県新産種の紹介Ⅱ . 長野県植物誌 53 : 93-99
- 藤田淳一・井浦和子・中村千賀・千葉悟志・松田貴子（2021）令和元年台風 19 号 (Hagibis) 後の千曲川氾濫原における植物相の回復状況 . 長野県植物研究会誌 54 : 1-20
- 藤田淳一（2021）長野県植物誌改訂調査で確認された県新産種の紹介Ⅲ . 長野県植物研究会誌 54 : 153-162
- 藤田淳一（2022）長野県植物誌改訂調査で確認された県新産種の紹介Ⅳ . 長野県植物研究会誌 55 : 133-142
- 星山耕一（2019）長野県新産帰化植物ハナハマセンブリ *Centaurium tenuiflorum* (Hoffmanns. et Link) Fritsch の報告 . 長野県植物研究会誌 52 : 79-80
- 角野康郎（2013）新会長のあいさつ . 日本植物分類学会ニュースレター 48 : 1-2
- 佐久間大輔（2011）自然史系資料の文化財的価値－標本を維持し保全する理由－ . 日本生態学会誌 61 : 349-353
- 志賀隆（2013）自然史標本を取り巻く管理者・採集者・利用者の関係－よりよい標本の保存・収集・利用を行っていくために－ . 日本生態学会誌 63 : 375-383
- 初宿成彦（2011）増加し続ける標本 / 減り続ける収蔵スペース－大阪市立自然史博物館における昆虫標本保管－ . 博物館研究 46(7) : 14-17